

# “不”の単独使用に関する一考察

——表記と使用頻度から——

新 沼 雅 代

## 0. はじめに

本稿では、(1) B 下線部のように、応答文の文頭や、(2) 下線部のように、話し手(或いは語り手)自身に対して発せられた単独の“不”を考察対象とし、文学作品における“不”について、表記上の問題と、“不, 不”や“不!”といった“不”の表記のバリエーションを使用頻度から、一部談話と比較して考えてみたい。(以下、用例の下線は筆者による)

(1) A: 你没觉得我其实很腼腆吗?

B: 不, 没觉得。 [浮出海面]

(2) “带我出去玩玩? 上白云观? 不, 晚点了; 街上遛遛去?”她要充分的享受新婚的快乐。 [骆驼祥子]

## 1. 表記に関する考察

### 1.1 “不”と後続する文の関係

中国語では以下(3)のような質問に対して、ABCのような応答はともに成り立つ。

(3) 你去吗?<sup>1)</sup>

A: 不, 我不去。

B: 不, 不去。

C: 不去。

Aは文頭の“不”に続いて、“我不去”という文が続いているが、Bは文頭の

“不”に“不去”が続き、“不去”の主体は明示されていない。さらに、応答ABだけでなく、文頭に“不”を用いずに“不去”のみの応答であるCも成り立つ。刘丹青2005(17頁)は、(3)ABのような応答文冒頭の“不”について、“你去吗? / 你去不去。—不, 我不去。”を例に挙げ、単独の“不”は、否定の副詞或いは否定の感動詞<sup>2)</sup>(原文は“否定叹词”)の二つの解釈の可能性があり、さらに、“不, 我不去。”の単独の“不”を“看作‘我不去’的省略形式, (略)”であるとされている<sup>3)</sup>。“你去吗?”という問いに対して、“不, 我不去。”と答えた場合、文頭の“不”は、意味的には“我去”を否定しているといえるが、“你去吗?”に対し、“我不去, 我不去。”といった応答は、一般的に成立するものではなく、さらに、“不”という応答に、省略されていると思われる成分を補充することができるケースは、例えば“你喝吗? —不, (我)不喝。”のように、“不”という応答に、「(動作主体+)“不”+動作」の形式が続く場合に偏る。例えば(4)Bの下線部のような“不”は、“我不好”或いは“我不晕船”を構成するものとは考えられない。

(4) A: 你还好吗? 出海还晕船吗?

B: 不, 我已经退役很多年了。 [我是狼]

さらに、例えば(5)Bの下線部“不”に省略されていると考えられる成分を補う際、動作“去”の目的である“游泳”は補充するべきだろうか。

(5) A: 你也去游泳吗?

B: 不, 我不去。

否定の副詞“不”は、動作とその動作の主体のみが必須の補充成分であると考えてよいだろうか。どのような成分が単独の“不”の前後に省略されているか、という点については個人差があり、その復元には統一性が欠けるのではないか。さらに、単独の“不”の前後に何らかの成分が省略されているという考え方は、吕叔湘1979(515頁)による省略の定義“第一, 如果一句话离开上下文或者说话的环境意思就不清楚; 第二, 经过添补的话是实际上可以有的, 并且添补的词语只有一种可能。”に沿うものではない<sup>4)</sup>。この点から、“不”は、“不”それ自身をめぐって想起される成分を含意している、と考えることはできないだろうか。

“不”の単独使用に関する一考察

刘丹青 2005 (18 頁) は、単独の“不”は、否定の副詞或いは否定の感動詞の二つの解釈が成り立つ、という指摘に続けて、“在另一些情况下，只能分析为独立的否定叹词或代句词，如‘小张也去了。——不，他没去。’这里的‘不’无法补充成‘他不去。’”と述べられており、本稿冒頭に挙げた用例 (1) をもっても、この指摘を確認することができる。

ここで、現代中国文学作品における“不”の使用状況を確認してみたい。老舎と王朔の作品 (詳細は本稿末尾参照) にみられる“不”の表記について調べた結果を表 1 に示す。“不”と“不”の間にコンマ(“,”)を用いない表記の使用 (“不不”など) が王朔にみえる。現代文学作品の修辞法のひとつであると考えられる。“不”が表記上さまざまなバリエーションをもつ (あるいはもたされている) ことは、“不”が後続発話の省略形であるという解釈をもって理解することを難しくさせ、否定の副詞と感動詞の二種の解釈の成立に妥当性を与える。

表 1 老舎 11 作品、王朔 25 作品中の“不”の表記 単位：箇所

作者 表記	老舎	王朔
不,	73	93
不, 不,	3	3
不, 不, 不,	3	0
不!	38	13
不!不!	9	2
不!不!不!	1	0
不不,	0	78
不, 不!	1	1
不不不不不	0	1
他	2	11
計	130	202

さらに、次の (6) A の“不,” という表記ならば“不”は、後続する“不去”の省略形と考えることもできるが、B の“不!” という表記の場合、“不去”の省略形というよりも、否定応答表現の“不”であるという印象を受ける。

(6) 你去吗?

A: 不, 不去。

B: 不! 不去。

### 1.2 語頭戻りの“不”

一方、“不”が明らかに後続する文の部分的重複であるといえる場合がある。それは、話し手が何らかの心的理由で「つかえた」場合である。定延・中川 2005 (213 - 219 頁) は、つかえを「延伸」と「とぎれ」にわけ、中国語における延伸が語の語末に生じることを指摘されている。「延伸」の例として、被験者が“流行 liúxíng”を発音する際に、考えつつ話しているためか語末の音節「xíng」を伸ばしたことを挙げている。また、「とぎれ」については、被験者が、ある果物が中国の一毛銭硬貨と同じくらいの大きさである、という発話の中で“中国 zhōngguó”を発音する際に「zhōng」と「guó」のあいだにとぎれが生じたことを挙げている<sup>5)</sup>。さらに、それらつかえが生じた直後に話し手がおこなう発音行動を「後処理」とし、「後処理」には「続行」と「語頭戻り」があることを指摘され、同書によると、「続行」とは、当該単語の残りの部分を続けて発音することで、「語頭戻り」は、当該単語の語頭に戻って発音をやり直すことである。そうすると、例えば“不去”という発話をつかえて、とぎれが生じ、その後処理として語頭戻りを行った場合の表記は、“不, 不去”となり、否定応答表現として“不”を用いた場合の“不, 不去”と表記上区別がつかないということになる。例えば次の(7) B 下線部“不”は、否定応答表現なのか、とぎれの語頭戻り処理なのか判断しかねる。

(7) A: 把我们的秘密文件偷走的人肯定是你吧?

B: 不, 不知道。

しかし、(8)のように、Bが「恐れ」を感じているように文脈で示すと、下線部“不”は、否定応答表現ではなく、とぎれの語頭戻りの処理であると受けとられる。

(8) (A 手里拿着刀子以威胁的口吻对 B 说)

A：你快说！把我们的秘密文件偷走的人肯定是你吧？

(B吓得脸色苍白)

B：不，不知道。

語頭戻りという処理が自然であると判断できる場合の話し手の発話態度として、定延・中川 2005 (219 - 222 頁) は「ためらい」「驚き」「苦しみ」を挙げられているが、(8) にみられるように、少なくとも中国語の文学作品においては、語頭戻りを生じさせうる話し手の発話態度として、「恐れ」も含まれるのではないだろうか。

さらに、「ためらい」「驚き」「苦しみ」「恐れ」という発話態度以外に、文学作品においては、話し手がつっかえを生じさせうる状況にあることを文脈で示すことによって、否定応答表現の“不”と語頭戻りの“不”を区別させることができる。極端な例ではあるが、以下(9)の話し手「虾蟆大仙」が吃音気味であることを、作者は発話の前に“有些结巴”(波線部：筆者加筆)と明示している。

(9) 虾蟆大仙说话老声老气的，而且有些结巴：“不，不，不要紧！画道催，催，催生符！” [骆驼祥子]

### 1.3 表記の転換

次に、表記の転換について考えてみたい。呂叔湘 1942 (242-243 頁) に“不”は“‘不’字是称代性及应对用的否定词。‘否’字以否定词而兼含动词或形容词于其内，所以是称代性。(略)古时‘否’和‘不’本是一字，通作‘不’，(略)问句末的‘否’亦多作‘不’，现在已经分化了。”とある。同書は“否”の字と“不”の字がもとは同じ字で、文末の“否”が“不”とよく表記されていたと述べてはいるが、応答文文頭の単独使用においても“否”と“不”が同じものとして用いられていた、とは直接述べていない。しかし、同箇所、否定応答表現として用いられた“否”を用例として引用されていることから、“否”と“不”が否定応答表現の用法においても通用する、と考えることが窺える。

そして否定応答表現の“否”が、“不”という表記に変わったのは、口語文による文学が提唱された文学革命の時期ではないかと予想されるのが一般的だ

と考える。筆者の調べる限りでは、少なくとも魯迅の翻訳小説において、文学革命の時期を契機に、“否”から“不”へという表記の変化がみられた。魯迅の翻訳小説(詳細は本稿末尾参照)に“否”と“不”という否定応答表現が用いられているかを、1917年の前後に分けて調べ、その結果を次の表2、3に示す。

表の見方であるが、“否”或いは“不”という表記があった場合の、その先行発話の形式を表左側に記す。本稿では“否”或いは“不”の先行発話を以下の四つに分ける。

- ① 諾否疑問文：YESかNOで答えることを求められる質問を表す文
- ② 疑問詞疑問文：WHにあたる情報の欠如を埋めるような応答を求められる質問を表す文
- ③ 語り、独話：会話体ではない語りの部分(地の文)、或いは、同じ話し手によるひとまとまりの発話

例) (10) 而且同时, 对于这老妪的憎恶, 也渐渐的发动了。--- 不, 说是对于这老妪, 或者有些语病; 倒不如说, 对于一切恶的反感, 一点一点的强盛起来了。 [罗生门]

- ④ 非疑問文：③以外で、先行発話が疑問の形式をとらない文

例) (11) A: 拿开手去! ……看我这边! ……

B: 不。 [省会]

表の出典欄に、原作の言語を記すが、魯迅が原作を底本として中国語訳したとは限らない(この点については後述)。また、“否/不”以外に、やはり「いや」「いいや」「いいえ」に相当する“不是”“没有”(“不然”、“未也”を含む)を、参考としてその他の表現欄に示すが、その数は括弧内の表記の変化形(重複、感嘆符付きなど)も含む。年号は〈魯迅著译年表〉による発表年である。以下同様。

“不”の単独使用に関する一考察

表2 魯迅 翻訳 (1917年以前)

単位：箇所

先行発話	“否/不”		その他の表現	出典
	否	不		
諾否疑問文	3	0	1 (不然)	1903 〈月界旅行〉 (仏) 1906 〈地底旅行〉 (仏)  計約 75,075 文字
疑問詞疑問文	0	0	0 <sup>6)</sup>	
語り、独話	0	0	0	
非疑問文	1	0	7 (不是/不然)	
計	4	0	8	

表3 魯迅 翻訳 (1917年以後)

単位：箇所

先行発話	“否/不”		その他の表現	出典
	否	不		
諾否疑問文	0	3	1 (不是)	1923 〈峡谷的夜〉 〈罗生们〉 (日) 1922 〈省会〉 〈连翘〉 (露)  計約 31,395 文字
疑問詞疑問文	0	1	0	
語り、独話	0	3	0	
非疑問文	0	2	0	
計	0	9	1	

表2、3から分かるように、翻訳作品において、1917年以前では“否”のみが、以後では“不”のみがみられる。一方、創作作品においても同様のことがいえるが、1917年の前か後かに関わらず“否/不”の使用がともに少ない。次の表4、5を参照されたい。

表4 魯迅 創作 (1917年以前)

単位：箇所

先行発話	“否/不”		その他の表現	出典
	否	不		
諾否疑問文	0	0	2 (未也)	1913 〈怀旧〉  計約 5,184 文字
疑問詞疑問文	0	0	0	
語り、独話	0	0	0	
非疑問文	1	0	0	
計	1	0	2	

表5 魯迅 創作 (1917年以後)

単位：箇所

先行発話	“否/不”		その他の表現	出典
	否	不		
諾否疑問文	0	2	1 (没有) 1 (不是)	〈呐喊〉(1918-1922 発表の14 作品を収載)  計約 88,128 文字
疑問詞疑問文	0	0	0	
語り、独話	0	0	0	
非疑問文	0	0	0	
計	0	2	2	

以上の表2～5から分かることは、魯迅の作品に限った上で、二点ある。それは①否定応答表現“否”は、ある時期を境に(本稿では1917年と仮定した)、その表記が“不”にかえられたのではないか、という点。次に、翻訳作品約106,470文字中、“否”あるいは“不”が13箇所用いられているのに対し、約93,312文字の創作作品においては、“否”あるいは“不”は3箇所しか見られないことから、②“否”や“不”といった否定応答表現は、魯迅の創作作品よりも翻訳作品において多く、その中でも1917年以後の翻訳作品において、色々な先行発話に対して用いられている、という点である。そこで二点目について、原作に“否”や“不”に対応する表現があったのではないか、という疑問が生じる。先に述べた「魯迅が翻訳する際に、原作を底本として中国語訳したとは限らない」ということと関連させ、少し触れたいと思う。魯迅は〈月界旅行辨言〉で、〈月世界旅行〉を井上勤が翻訳した『九十七時二十分間・月世界旅行』から重訳した、と述べている。さらに、井上の『九十七時二十分間・月世界旅行』に「米国 ジュールス、ベルン氏原著」と書かれている箇所を魯迅は忠実に《月界旅行》において“美国 培伦作”と訳している(南雲1978)。ちなみに原作は、ジュール・ベルヌ(仏)『月世界旅行』(Jules Verne : *De la Terre à la Lune*)である。

内容については、28章あった井上訳が魯迅訳では14回になっている。大谷1983は、〈月界旅行〉〈地底旅行〉は「翻譯よりも翻案に近いものである。當時

の翻譯作品の多くが、外國文學の單なる紹介にとどまらず、譯者の主張をより直接的に代辨する役割をもっていた」と説明されている。〈月界旅行辨言〉で述べられているように、確かに魯迅は〈月界旅行〉(及び〈地底旅行〉)を通じて、科学知識を大衆に普及させ、大衆に長年根付いた迷信を払拭しようという意図があった。

つまり、井上訳本『九十七時二十分間・月世界旅行』に現代語の「いや」「いいや」「いいえ」がある箇所に、魯迅訳本の〈月界旅行〉で必ず“不”等の否定応答表現があげられているとは限らない、ということである。一方で、〈峡谷的夜〉(1923)では、原作の江口渙『峡谷の夜』を魯迅は忠実に訳している点から、魯迅の翻譯に対する態度の変化が窺える。以下に参考箇所を引用する。

(12)

A: 「とにかく今云つたやうな譯で思はず倒れたもんですから、私、つい蝙蝠傘と荷物とをそこへ落して來たんですが、それを何とかして戴けないでせうか」

B: 「おれに拾つて來いと云ふか」

A: 「いいえ。無論一緒に行きますとも」 [峡谷の夜]

(13)

A: “总而言之，象刚才说过一样，因为是不意中跌倒的，所以我，将阳伞和东西都掉在那地方了，这可能请想一点法么？”

B: “教我替你拾去么？”

A: “不，自然一同去。” [峡谷的夜]

以上のことから、魯迅の“否”から“不”への表記の移行が、文学革命を契機に行われたと結論付けることは早計かもしれないが、“否”から“不”への表記の移行を追いかけてみると、文学革命がやはり一つの境界になっているのではないかと考えられる。しかし、この問題を追及することは、本稿の趣旨からそれるため、ここでは素朴な意見としてとどめ、今後より多くの作家のデータをとって結論を得たいと考える。

## 2. 使用頻度に関する考察

### 2.1 先行発話別

ここでは、文学作品において否定応答表現“不”がどのような状況で用いられているかについて考えてみたい。老舎による11作品（詳細は本稿末尾参照）を資料とし、“不”の先行発話、及び“不”の使用頻度について調べ、その結果を下記の表7、8、9に示す。なお、老舎11作品中には、疑問詞疑問文に対して、“不”及び他の表現が用いられている箇所は無かった為、“不”の先行発話を、疑問詞疑問文を除いた「諾否疑問文」「語り、独話」「非疑問文」の三つに分ける。また、表中の“否”は先行発話が否定形であったことを示す。老舎11作品中、〈四世同堂（上）〉、〈四世同堂（下）〉<sup>7)</sup>、〈老張的哲学〉、〈二馬〉以外の7作品は「その他」にまとめた。表中の「……」「—」は、「発話や話題の中断」を表わす<sup>8)</sup>。

表7 《諾否疑問文》に対する“不”

単位：箇所

出典	表記		不…… 不—		不!不!		不!不!不!	計	その他の表現
	不	不!	否	否	否	否			
四世同堂 (上)	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (没有)
四世同堂 (下)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
老張的哲学	0	1	0	0	1	0	0	2	0
二馬	0	3	2	1	0	2	0	8	2 (不是)
その他	0	3	2	0	0	2	0	7	1 (不是)
計	0	7	4	1	1	4	0	17	4

“不”の単独使用に関する一考察

表8《語り、独話》に対する“不”

単位：箇所

表記 出典	不,	不!		不, 不,	不, 不, 不,	不!不!		不! 不! 不!	計	その他の表現
			否				否			
四世同堂 (上)	10	4	0	0	0	1	0	0	15	0
四世同堂 (下)	26	1	0	2	2	0	0	0	31	0
老張的哲学	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0
二馬	0	2	0	0	0	1	0	2	5	0
その他	29	2	0	1	1	1	0	0	34	3 (不是)
計	65	10	0	3	3	3	0	2	86	3

表9《非疑問文》に対する“不”

単位：箇所

表記 出典	不,	不!		不…… 不—	不!不!		不!不!不!	計	その他 の表現
			否			否			
四世同堂 (上)	3	7	0	0	0	0	0	10	0
四世同堂 (下)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
老張的哲学	0	8	0	0	0	0	0	8	0
二馬	3	2	0	0	0	0	0	5	0
その他	3	0	0	1	1	0	0	4	1 (不是)
計	9	17	0	1	1	0	0	27	1

老舎11作品における“不”の用いられ方は、全体的に、YESかNOの応答を一般的に求められる諾否疑問文に対してよりも、非疑問文に対して“不”と応じている方が多いこと、また、その他の表現より“不”という応答が圧倒的に多く使われていることが分かる。

## 2.2 談話での使用と比較

一方、談話における“不”について考えてみると、“不”といった応答は、討論など相手の意見を明確に否定する必要がある場合以外、なるべく使用を避けるということはネイティブに共通した認識であろう。なお、談話における“不”の機能について、新沼2006では、否定応答表現の中でも自分の意見を述べることに重点を置いた場合に用いられる否定応答表現であると捉え、さらに、“不”は、相手発話に対する予測的な応答や、発話の順番とりや割り込みを防ぐといった側面をもつことを、ターンテイキングの観点から考えてみた。談話では、発話内容以外に、相手の身振りや表情、発話の調子等によって、聞き手が話し手である自分の発話に対して否定的であるかどうかを知ることができるが、文学作品においては、文字(記号)表記と文脈以外に登場人物の否定的反応を知る術がない。それを補うために、“不”の表記に様々なバリエーションをもたせられていると考える。それゆえに、実際の談話ではあまり“不”といった否定の表現の使用が必須とはいえないような場合にも、文学作品では“不”が用いられていたりする。

ここで、文学作品と談話における“不”の使用頻度を比較してみたい。談話の資料として、合計28コマのインタビュー番組と討論番組(詳細は本稿末尾参照)を用いた。調査した番組内では、約1150分間に“不”は合計10箇所用いられており、うち1箇所だけが否定疑問に対する“不”であった。文学作品は、約197,280字<sup>9)</sup>中に130箇所“不”が用いられていた。談話約1150分中に10箇所“不”が出てくると、文学作品約197,280字中に130箇所“不”が出てくることを、どのように比較すればよいのか、という問題が生じる。まず、中国の中央電視台(CCTV)の《今日说法》《讲述》という番組のナレーションの字幕を数えてみると、約28秒間に125字が字幕に示されていた<sup>10)</sup>。この数値を基準として、“不”が何文字に1回用いられているか計算してみると、文学作品では約1,517文字に1回“不”が用いられ、談話では約30,800文字に1回“不”が用いられていることになる。

また、今回談話の資料としたインタビュー番組や討論番組において、挿入

VTR等の一方的なナレーションを、文学作品における語り或いは独話に相当するものであるとも考えてみる。文学作品の語り或いは独話に用いられる“不”は、130箇所中85箇所であった。130箇所からこの85箇所を引いた残りの45箇所の“不”、つまり相手に対する応答としての“不”が、何文字に一回用いられるのか計算し直してみると、約4,384文字に1回“不”が用いられていることになり、やはり談話における“不”の方が、文学作品の“不”より圧倒的に使用が少ないといえる。

### 3. おわりに

今回、否定応答表現の“不”を、表記と使用頻度から考察してみた。分かったことは以下の4点である。否定応答表現“不”は、

- 1、表記上、とぎれの語頭戻り処理と同じ場合がある。
- 2、魯迅の翻訳作品における否定応答表現について、文学革命前に翻訳された〈月界旅行〉〈地底旅行〉には“否”の表記がみられ、“不”の表記はみられない。一方で、文学革命後に翻訳された〈峡谷的夜〉〈罗生们〉〈省会〉〈连翘〉には“否”の表記はみられないが、“不”の表記はみられる。
- 3、老舎の創作作品において、“不”は「諾否疑問文」より「語り、独話」や「非疑問文」に対して多く用いられている。また、“不是”、“没有”より明らかに多く“不”という表現が用いられている。
- 4、老舎の創作作品と、テレビ番組《艺术人生》《名将之约》《时事辩论会》における“不”の使用頻度を比較した結果、“不”は圧倒的に老舎の作品の方に多く用いられていた。

また、以下の2点について、今後の課題として、より多くのデータをとり結論付けたいと考える。

- 1、魯迅の作品において、否定応答表現の“否”“不”が、創作作品よりも翻訳作品に多く、また色々な先行発話に対して用いられていることから、中国の文学作品では、本来“否”や“不”という否定応答表現は、使用しないのが一般

的であったのではないか。そして、現在“不”が多く、また多様に使用されている背景には、文学革命と外国作品の翻訳から影響を受けたという点があるのではないだろうか。

2、談話において、“不”という否定応答はその使用に制限を受けること、また、文学作品において、発話者の否定的な反応を視覚的に表現する必要から、“不”は談話より文学作品に多く用いられている、といえるのではないか。

### 注

- 1) 出典明記のない用例は、インフォーマントのチェックを経た作例である。
- 2) 本稿では“叹词”=感嘆詞=感動詞(応答詞を含む)と考える。
- 3) 一語で文になりえ、日本語の否定の応答詞「いや」「いいや」「いいえ」等にあたると思われる表現を、本稿では「否定応答表現」と呼ぶ。また、独話や同じ話し手の一続きの文や発話にあらわれる場合も含む。また、先行発話と形式上呼応している場合は、それを否定応答表現には含まない。例えば、“你是中国人吗? —不是。”“他也去了吗? —没有。”
- 4) 同書では、省略の例として“他买了两本画报, 我也买了一本(画报)。”を挙げている。
- 5) “流行”“中国”といった日常的な語彙をネイティブがつかえるかどうかといった妥当性については現段階では問題としない。
- 6) 中国語における疑問文に対する応答の形式は、応答文冒頭に必ずしも否定応答表現を用いるわけではない。例えば、疑問詞疑問文では、情報の欠如を埋めるように応答されるのが一般的である。(“A: 你哪个大学毕业的? B: 不, 我没上过大学。”のように、疑問詞疑問文に対して、否定応答を用いて答える場合もある。)さらに、諾否疑問文にも、例えば“A: 你自己编辑吗? B: 不编。《艺术人生》”のように否定応答表現を応答文冒頭に置かずに、直接そこで使われている動詞等を用いて答えることが多い。また、相手の疑問に対して、答えたくない場合は、次の梁朝伟のように、婉曲な表現で応答を拒否或いは留保するという応答形式もある。“司会者: 有一种说法说, 因为王家卫导演, 把梁朝伟从一个明

## “不”の単独使用に関する一考察

星改变成了一个演员或者说是艺术家，你认同吗？——梁朝偉：我不觉得自己是艺术家，不过是个演员，演戏演得好也没什么了不起。《艺术人生》”

- 7) 〈四世同堂〉は文字数が多いため、上下で二作品とみなした。
- 8) “破折号（—）”は、“表示说话的中断或停顿”、“省略号”（……）は、“表示话题中断”と捉える。《标点符号规范使用手册》（凤凰出版社 2005）を参考。
- 9) 文学作品の文字数は、1 ページあたりの文字数にページ数をかけるという方法で算出した。
- 10) ナレーションの字幕を基準にした理由は、談話の字幕は、フィラーやつつかえ等を文字化せずに省略している場合があるからである。さらに、この約 28 秒というのはポーズが占める時間を含んでおり、純粹に 125 文字を発話するのに約 28 秒かかる、というわけではない。

### 【参考文献】

- ・井上勤 1888 『九十七時二十分間・月世界旅行』自由閣出版
- ・江口渙 1919 「峡谷の夜」『赤い矢帆』新潮社
- ・大谷通順 1983 「魯迅譯『月界旅行』と『地底旅行』—そこに表われた牢獄脱出のイメージについて」『日本中国学会報第三十五集』
- ・定延利之・中川明子 2005 「非流ちょう性への言語学的アプローチ—発音の延伸、とぎれを中心に—」『活動としての文と発話』串田秀也他編ひつじ書房
- ・周生亚 2004 〈说“否”〉《中国语文》第二期
- ・刘丹青 2005 〈汉语否定词形态句法类型的方言比较〉《中国語学》No.252
- ・吕叔湘 1942 〈中国文法要略〉《吕叔湘全集第一卷》辽宁教育出版社 2002
- ・吕叔湘 1979 〈汉语语法分析问题〉《吕叔湘全集第二卷》辽宁教育出版社 2002
- ・〈魯迅著译年表〉《魯迅全集》第 16 卷人民文学出版社 1973
- ・南雲智 1978 「魯迅と「地底旅行」」『日本中国学会報第三十集』
- ・新沼雅代 2006 「否定応答表現“不”について」『日本中国語学会第 56 回全国大会予稿集』

### 【用例出典】

- ・[浮出海面]：《王朔文集》云南人民出版社 2002
- ・[我是狼]：《王朔文集 2 摯情卷》华艺出版社 1992

- ・ [骆驼祥子] : 《老舍全集》第3卷人民文学出版社 1999
- ・ [省会] : 〈现代小说译丛〉 収
- ・ [罗生门] [峡谷的夜] : 〈现代日本小说译丛〉 収
- ・ [峡谷の夜] : 【参考文献】 参照

【資料】

- ・ 表1 <http://www.shuku.net> の王朔 25 作品より作成。
- ・ 表 2.3 〈月界旅行〉〈地底旅行〉〈现代小说译丛〉〈现代日本小说集〉 : 《鲁迅全集》第 11 卷人民文学出版社 1973
- ・ 表 4 〈怀旧〉 : 〈集外集拾遗〉《鲁迅全集》第 7 卷人民文学出版社 1981
- ・ 表 5 〈呐喊〉 : 《鲁迅全集》第 1 卷人民文学出版社 1981 所収 〈狂人日记〉〈孔乙己〉〈药〉〈明天〉〈一件小事〉〈头发的故事〉〈风波〉〈故乡〉〈阿 Q 正传〉〈端午节〉〈白光〉〈兔和猫〉〈鸭的喜剧〉〈社戏〉
- ・ 表 7.8.9 〈四世同堂 (上)〉〈四世同堂 (下)〉〈老张的哲学〉〈二马〉〈小坡的生日〉〈猫城记〉〈离婚〉〈牛天赐传〉〈骆驼祥子〉〈文博士〉〈火葬〉 : 《老舍全集》1 ~ 5 卷人民文学出版社 1999
- ・ 2. 2 では下記の 5 種のテレビ番組を資料とした。

《艺术人生》《名将之约》《今日说法》《讲述》 : 中央电视台

《时事辩论会》 : 凤凰电视台

字幕がある番組は、ポーズがスペースで表されていた。引用する際、筆者の判断でスペースをコンマや句点に置き換えた。字幕がない番組は、書き起こす際に筆者の判断でそれらを付し、インフォーマントのチェックを経た。

(にいぬま まさよ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程)